

Salamander in the circle

第九章

原子の火

峯村 明

Salamander in the circle

登場人物

イリチャ・・・・・・・・火の精霊
ヤスウ・・・・・・・・ネウトラ評議会・学術調査団の団員
バイスロイ・・・・・・・・黄金門の皇帝の息子
ウルリク・・・・・・・・ケストル王国・第三王子
ハイヤーン・・・・・・・・ネウトラ評議会・本部科学者のリーダー
ティコ・・・・・・・・〃・・・・科学者
パンテオラ・・・・・・・・メッサナ市の総督
コモラ・・・・・・・・総督の顧問
パルダリス・・・・・・・・メッサナ市の総督家の一人。総督代理
メンドルプ・・・・・・・・メッサナの化学者
ベネトナシュ・・・・・・・・死神

これまでの主な登場人物

ダーヴェ・・・・・・・・ネウトラ評議会・学術調査団の団長
ヒューダー・・・・・・・・〃・・・・団員
ホシナ・・・・・・・・世界の果ての島に住むホシナ族の族長。マミヤの父
オマキ・・・・・・・・ホシナの妻
ゴン・キト・カボ・・・・・・・・ホシナ族の男たち
パウル・・・・・・・・ケストル王国・国王
ヘンリク・・・・・・・・〃・・・・第三王子ヘンリクの息子
ソルド・・・・・・・・〃・・・・警備隊長
サノヒコ・・・・・・・・島の王に仕える役人
バラム&バランケ・・・・・・・・双子のジャガー。パンテオラの部下
マミヤ・・・・・・・・ホシナ族の娘
レル・・・・・・・・エウメロス王国・王室付き近衛隊長
ヘルガ・・・・・・・・〃・・・・王女
コタエ・・・・・・・・世界の果ての島の王に仕える女官
スクナ・・・・・・・・コタエの兄

目次

原子の火

148.

149.

150.

151.

152.

153.

154.

155.

156.

157.

158.

159.

160.

161.

162.

163.

164.

おまけの番外編というか番外編のおまけ

火精霊に聴く -原子の火に関する一問一答-

第九章のあとがき

奥付

原子の火

“われわれははっきりと立証しよう。
黄金作りなどはそれほど重視していないし、たんなる副業としかみていないことを。そしてこういおう。…なんだ黄金か、たかが黄金か…、と。なぜなら全自然が解き明かされている者にとっては黄金がつくりだせることなど、悪魔が自分自身に従順であるのと同じくらい、少しも喜ばしいことではないからである。”

148.

思いがけない吉報が飛び込んできた。いや、転がり込んできた。

ベネトナシュはその報を聞いて思わず姿勢を正した。

アンベレオ王国の一軍が自治領メッサナ市へ向かい、総督自身と総督府の人員全員を本国へ移送したという。ベネトナシュとしてはそこまでやるつもりはなかったのだが。

人間たちが自主的に行動を起こしたのである。そうしなければならぬほど、一音楽学生をめぐるメッサナ市の騒動は見過ごしにできなかった。と、いうより、本国介入の口実を与えることになってしまったのだった。

「種は蒔いておくもんだよ」

アンベレオ本国とメッサナ市との間には溝がある。抽象的な意味ではなく、海峡があるのだ。

遠い昔に災害が国土を分断してしまったため、メッサナ市は規模からして独立国といってもいいようなものだが、メッサナ市総督の家系とアンベレオの王家とは近い親戚関係にあり、本家の王家は裕福な親戚を独立させたくなかったのだった。

「だって……向こうの方が住民の人気は高い、資産も人材も豊富ときている。はっきりいってこっちはちょっと落ちる。つまり、いつ乗っ取られるか、わかったもんじゃない。そう思わないかい？」

常々、本家の人間にそう吹き込んできたベネトナシュだった。あいにく、総督家の方にはそんな野心もなければ興味もなかったのだが、吹き込まれてしまった方はそうはいかない。そうとう前の時代から、本家のなかでは総督家をひそかに敵視する者が多かった。

統治者間の関係のほかにも、メッサナ出身の人材は、よくできた。さまざまな分野で技術も質も高く、ひじょうに優秀だったので、これまたひそかに本国の敵視を買うことになった。

「どんな場所にも黒い芽は芽生えるものさ」

死神はそうつぶく。片手にはお茶の入った陶器の茶碗、片手にはお揃いの受け皿。メッサナ製である。

「こうやって繊細に、エレガントにやるのが私の本来の流儀だ」

いや。それはむしろご主人様・冥界王の流儀で、ご主人様の好みなのだ。

「だからねえ」、と彼はつぶやく。「巨人族なんかに、ほんとは、手を出したくなかったんだ。どうみたってエレガントとは程遠いもの。なんだが、パワーとスケールとグロテスクさ、アレがケストル人には受けるんだよねえ。いや、じっさい、彼らにはお似合いというものさ」

149.

アンベレオ本国にとってメッサナ市が特別の意味を持つ理由はいくつもある。そのひとつが、化学者と錬金術師の存在である。

この時代、建築物の装飾、工芸品制作には輝く金属、つまり金や銀の需要は非常に高い。その金や銀は掘り出されたり、遠くから運ばれてくるのではない。現地で作っている。化学者と技術者からなる貴金属制作者集団がメッサナにいるのだ。むろん、高品質の貴金属を作り出すにはそれなりの技術と知識と経験とが必要であるが、メッサナには喜んで没頭し、従事する人々が大勢いた。

くどいようだが、メッサナは知と美の殿堂である。知と美から収益をあげようという考えは、もっていない。少なくとも、メッサナ自体は持っていなかった。それがアンベレオ王国の誇りだった、そんな時代もあった。

が、ある時、王家の人間は気がついた。貴金属は儲かる。

国土を分断した大災害の後、アンベレオ王国の危機を救済しようと、他国が工芸品を高額で買い取ったのだ。王国の立て直しに一役も二役も役に立ったのだが、我に返った王家本家の面々には、それすら忌々しいのだった。

メッサナ市は貴重で深遠な技術と知識と経験とを徹底的に保護した。メッサナ総督家と制作者集団との間には強靱な信頼関係が生まれた。庇護する者とされる者、いや、応える者という関係、欲も得もない純粋な関係だった。

*

そして、そこへ楔[くさび]を打ち込もうとする者が現れる。

*

制作者集団は総督家の保護下にあった。

総督家といっても一人二人ではない。七十名から成る集合体でそのトップにいるのがパンテオラ氏である。彼らの下にあるものは彼ら全員の同意がなければ動かすことはできなかつた。七十名全員の同意など、どだいあり得ない。ようするに、いったん総督家の下におかれたものは動かすことはできないということだ。

ところが、ここにある可能性が出てきた。七十名が『うん』と言わずにいられない事態が起こったのだ。パンテオラ氏捕獲である。

ありていにいって、彼女を返して欲しければ身代金を差し出せということだ。

王家が総督家の『金脈』に並々ならぬ執着を抱いているのを知って、ベネトナシュはうんざりする。

「どこがいいのかね、あんなもの。まったく理解に苦しむよ」

それもそのはず、彼は輝くものが大の苦手なのだ。そもそも、彼や彼のご主人さまがメッサナ市に手をだせなかつた理由のひとつはそれだったのだから。

「ま、それは人間同士の問題。私には関係ない。身内同士でやりあえばいい。——でも、ちょっと面白そうだよね——」

総督家が『金脈』を差し出した場合……王家が乗り込んでくるということであつて……総督家もただでは済まないだろう。

総督家が『金脈』差出を拒んだ場合……パンテオラ氏はただでは済まないだろう。彼女にも近い親族がいる。総督家内部に亀裂なり、歪みが生じるのは想像に難くない。

これまた総督家はただでは済まないだろう。

ベネトナシュの目が輝きだした。わくわくしてきたのだ。

しかし、わくわくしてばかりもいられない。ケストルのウルリク王子が呼んでいる。

(いいとこなのに) 舌打ちをしながら茶碗を置く。

(忙しいったらありゃしないよ、ったく。おちおちお茶を楽しむこともできないなんてね)

(またウルリク王子がせっかちときたもんだ。王の器じゃあないね)

やれやれ、とため息をつくベネトナシュである。(使える手下、いや、アシスタントが欲しいよ)

そして彼は、はた、と立ち止まる。(——王家が『金脈』を手に入れたとしたら——こっちが手をだせなくなるってことじゃないの??)

150.

ウルリク王子は血走った目でベネトナシュを迎えた。頬もげっそりとかけてしまっている。ベネトナシュが、と、胸をつかれたほどの憔悴ぶりであった。

「————」

「どうしたんだね……」思わず、自分から声をかけてしまったベネトナシュである。

「エウメロスの王女を追撃に出た航空機が戻らない。行方不明だ」

「……………」

「国境の山岳地帯は地形がおそろしく険しいうえに針葉樹の原生林地帯でもある。遭難

したとしても探し出すのは不可能だ」

「それは——操縦士は気の毒に」

「そんなものはどうでもいいのだ！」ウルリクは噛みつくように言った。「問題はエウメロスの王女だ！ 巻き込まれて墜落したかもしれんし、もしかしたら生きているかもしれん！ いちばんまずいのは、のこのこ帰国されることだ——」

「そんな心配はいりませんよ。王子様。そんなこともあろうかと、彼女には病気になってもらいましたからね」

「……そうなのか？」

「時間がなかったので勝手にやらせてもらいました。父君パウル王の体を使って強烈な暗示をかけた。彼女は……口がきけません」

「なんと……かわいそうなことを……」かわいそうだとは思っていないことは、彼の目にともった光が如実に語っている。「そうならそうと、早く言ってくれればいいものを」

「王子様」ベネトナシュは、片方の眉をぴくりとわずかに吊り上げた。「私を、信用してくださっているのでは？」

「あ、あおおう、もちろんだとも、もちろん信じているとも、当たり前ではないか」若干うろたえ気味のウルリクを斜めに構えた位置からちらりとみやるベネトナシュ。

「そうそう。バイスロイさまはどうされています？」

ウルリクは顎を持ち上げつつ、ひどい渋面で応じた。「そう、それ！ バイスロイ！ 巨人族をなんとかせよの一点張りなのだ！」

「なんとお答えになったのです？」

「こちらに言われても困ると。被害に遭われたことにはお悔やみもお見舞いも幾重にも申し上げるが、我々のあずかり知らぬこと、どうにもできませぬと、そのように」

ベネトナシュは鼻を鳴らした。「ま、正解ですね」

「しかし、なんでまたそんなことを言いだしたのか。我が国と巨人族の関係など、だれも知らぬはずだが」

ベネトナシュはまた鼻を鳴らした。「とはいえ、ちょっと考えればわかりそうなもの」

え、とウルリクは頭を巡らせてベネトナシュを見た。「どういうことだ？」

「ざっとあちこち見渡して、守りの固い黄金門もネウトラ評議会本部もやられている。しかしやられていないところは数えるほどしかない。なぜか。なぜですか、ウルリクさま？」

151.

ケストル国王・パウルはバイスロイを丁重にもてなした。なんといってもバイスロイは黄金門の皇帝の子息。力関係上では、新興国ケストルなど皇帝の鼻息で吹き飛ぶのではないかというくらいである。そのご子息が突然、「婚約者を返せ」と言ってただならぬ面相で乗り込んできたのだから、さすがのパウル王もびっくり仰天であった。

しかしそこは曲がりなりにも百戦錬磨の国王、「エウメロスの王女殿下には本国の緊急事態を慮って、ケストル国内に滞在いただいたまでのこと、ご婚約者の早速のお出迎え、いたみいる所存にござる」とかなんとか、時代劇のようなセリフで平伏しておいた。たしかに表向きはそういうことである。

エウメロス国王崩御の事実はバイスロイによってきつく口止めされ、伏せられていた。そうしなければ律儀で正直なエウメロス人のこと、あっさりと知らせてしまっていたらろう。

(これはひょっとしたら……イケるかもしれない)

バイスロイと共にケストルに残ったエウメロス国務省高官・ロウナスの思いである。
さて、なにがイケるといふのか？

(ただ今の便宜上の婚約関係を実行に移したらどうかというておるのだ……)

十三歳のカール王子が成人して王位を継ぐまでまだしばらく時間がある。それまでは先代王の弟が摂政を務める。姉のヘルガ王女が黄金門と婚姻関係を結べば……どんなメリットがあるものか……想像もつかん。黄金門だぞ、皇帝と親戚になるのだぞ……！)

ロウナスは忘れていたようだが、肝心のヘルガ王女はご病気である。

(そ、そうであった！ あんまり長いこと放っておかれたもんだからすっかり忘れていた！ 王女殿下はご病気だった！)

一方、こちらはバイスロイと彼の参謀パソネル。彼らが来ているのは。劇場である。

「長旅、お疲れでござりましょう。ここはひとつ、ごゆるりと観劇でも」、と、ケストル王の、下にもおかぬ心遣いである。が、エウメロス陣は招かれていない。

バイスロイとパソネルは目を見かわす。

(えげつないな) (あからさまですな)

(だいたい、我々はこんなことをしている場合ではない！) (いやまったく)

舞台は歌劇だった。

バイスロイは本場の舞台を幾度も観ているし、じつは、自身、舞台に立ったこともあ

る。場所はメッサナ。知と美の殿堂。趣味が高じて歌って踊って芝居もできるようになってしまったのだ。それだけに、目も肥えている。

しばらく眺めてから、（こ、これは——！）と思った。じわり、と額に汗が浮かんでくる。興奮のせいではない。脂汗だ。

（これは……たまたん……これを見続けねばならんのか……）

バイスロイは目を閉じ、耳を塞ぎ、自身の心象風景に集中することにした。そこに行けば、メッサナの女学生が彼のためだけに心揺さぶる歌を聴かせてくれるのだった。

——なだらかにうねる丘に白いひなぎくがそよいでいる。黄金門市という人造都市で生まれ育ったバイスロイには縁もゆかりもない景色。そのなかにたたずんでいるのは瑠璃色の衣装の女。白に近い金糸の直毛を背に流し、横顔を見せ、かすんだ目を遠くへ投げている。

——エウメロスの王女。生気のない虚ろな目で奴隷の少女と手を繋いでいた彼女に、バイスロイはすぐに興味を失くしてしまった。

（あのような女でも王家の人間となれば使い道があるのだな。正妃とするのもわるくないかもしれん。それにしても）、と彼は思う。舞台では道化役者が観衆を笑わせている。

（臣民揃ってのんきなやつらだ。なるほど、巨人族に襲われる心配はいらないということだな）

ハイヤーン博士は物理学者ティコの顔をまじまじと見た。ティコの提案は福音なのか、それとも――

ティコは目に強い意志をみなぎらせて言った。「検討すべきです！ この調査書を！」

ダーヴェのチームが巨人族についての調査を行っていたように、ネウトラ評議会には世界中のエネルギー分布についての調査を手掛けていたチームがあった。ティコは前からその調査書に引っかかるものを感じていた。

曰く、非常に、非常に古い時代から、平均して、継続的にエネルギー値の高かった場所がある。おそらく、レムリアンも知っていたらと思うられる、赤道に近い場所だ。それほど険しい地形ではない。内陸の、割合、なだらかな起伏が広がる高原地帯で、水も豊富にある。たしかに、植生はまばらで生活するには何もなさすぎる場所ではあったが、調べてみると、レムリアンらはその地を避けていた節があった。レムリアンだけでなく、動物もだ。

時代が下り、データが増えてくると、その原因がわかった。この地、オクロと名付けられた地の地下には、放射性の物質が埋まっていたのだ。それはさしも強靱な肉体をもつレムリアンでも避けて通りたい場所だったのだ。

“ 天然の放射性の物質[ウラン]に富んだ鉱床に地下水が染み込んで、水が中性子減速材として機能することで核分裂反応が起こる。

核分裂反応による熱で地下水が沸騰して無くなると反応が減速して止まる。

鉱床の温度が冷えて、短命の核分裂生成物が崩壊したあと、地下水が染み込むと、また同じサイクルを繰り返すという状態 ”

つまり、天然の原子炉の状態が、太古から延々と続いていたのだ。

千年や二千年の話ではない。数十万年である。そのエネルギー量たるや……

しかし、ネウトラ評議会の物理学者らが注目したのは、エネルギー量もさることながら、レムリアンがそれを避けていたという事実だった。

「オクロと同じもの、同じ状態を我々の手で、人口的に再現できるとしたら！ 巨人族を撃退できるということですよ！！」

ティコはぐいと身を乗り出し、ハイヤーン博士の目をのぞき込んで言った。「検討すべきです！ この調査書を！」

153.

「何を迷いますか、博士！！ 解決策が見つかったというのに！！」

ティコは自分の差し出した提案にハイヤーン博士が躍り上がって喜ぶと思っていた。そしてすぐに許可が下り、対策に駆けださねばと思っていた。しかし博士は天然原子炉の分厚い調査書を前に化石化したように固まってしまった。険しい眼差しがその表紙の上に落とされ、中を確かめようとしめない。そんなものに価値はない、くだらない、と一笑されたほうがまだましだったかもしれない。博士は、あきらかに『それ』を知っていたのだ。

「ティコ、きみは——」

博士はようよう、かすれた声を絞り出す。「私の話を、聞いていなかったのか」

「何のことですか」

「かつて、巨人族対策として強力な薬剤が使われたことだ。それはこの星の大気を乱し、地殻変動を誘発した」

「ああそのこと。五万年も前の話でしょう？ 我々の祖先は知恵も経験も足りなかったのです。愚かだったのですよ。だからそんな間違いを起こしたのだ」

ティコは乗り出していた机から身を起こして両手を腰にあてがい、ハイヤーン博士を見おろし、そう言い放った。

博士は雷に打たれたように、びくりと体を震わせ、ティコを見上げた。

「祖先は愚かだったと——」

「なにせ、五万年前の人たちですからね。愚かなうえにすることが手ぬるかった。大気を乱して、地殻変動を誘発したんですしたっけ？ ご先祖たちは踏んだり蹴ったりだったわけだ。あげく、今になって奴らを復活させてしまうとは。なぜ徹底的に殲滅させなかったのだ！！ 我々は……いい迷惑だ！！」

「何をいっておるのだ——」

「博士は以前からずっと穴倉のようなところに潜ったきりでなにもご存じないかもしれませんが。私は妻を娶ったばかりだった。同僚のある者は崩れてきた建物の下敷きになり、ある者は幼い子どもをさらわれ目の前で……絶望のあまり彼は……またある者は……。ああぜんぶ過去形だ！！ それもこれも！！」

「祖先の仕事が手ぬるかったからだ、と？」

「その通りです。それが事実です。評議会の礎かなにか知りませんが、五万年も前のそんな事は、あなたの感傷にすぎない！ この世界的危機にただ手をこまねいているだけの評議会など、どんな存在意義があるというのです！？ 我々は、生き残った者はこれから生きていかねばならないのですよ、手遅れになる前に、手を打たなければならんです！！」

154.

祖先が糾弾されるのを聴きながら、いくらかは当たっているかもしれないとハイヤーン博士は思う。だが、大きな鉤鼻を振り回し、口角泡を飛ばすティコはどうかしているとも思う。

遠巻きにしている者たちはどうか。

博士の視界にいる者たちはティコの剣幕に鼻白みながらも、彼の気持ちはわかる、という顔つきが多かった。頭部に雑に包帯を巻いた者、片方の腕をありあわせの布で吊っている者もいる。目つきが怪しい者は、心を病んでいるのか。みな、なにがしかの傷を負っていた。

ハイヤーン自身は負傷はしていない。ティコの言う通り、評議会本部の穴倉のような地下施設にこもって研究に没頭していたからだ。巨人族襲撃の急を聞き、博士はすぐさま、さらに深部へと潜った。逃げ込んだわけではない。巨人族の過去の資料を調べるためだった。

そして、同時に別の情報をも手に入れることになる。

巨人族の活動範囲が赤道付近を中心にしていたことはわかっているが、その範囲内にあるにもかかわらず、彼らが決して近寄らなかった場所というのがあった。それが、ティコのいうあの場所、オクロだったのである。

その地下に放射性物質が埋もれているゆえに生体に強い影響があることを彼らは経験上知っていたのか。彼らはむしろ、本能的に知っていたのだ。

ティコの専門は物理学と数学だった。彼は古い運河、灌漑施設、水道設備改良に骨を折り、実績も多数あった。仕事に熱中したあまり、婚約者をさんざん待たせて、ようやく娶ったばかりだった。

理屈さえわかれば同じ物がつくれる、彼はそう確信していた。オクロにある天然の炉と同じ物を、自分になら再現できる。彼はそう確信していた。さいわい、資料は手元に

山ほどあるのだった。

155.

「大変です——」

評議会本部内勤職員ナシル。顔も体つきもひよろりとして色白、額にかかるもじゃもじゃの黒髪。彼を見ると苦手な野菜を連想してしまうティコである。重鎮ハイヤーン博士相手に一石を投じたところで、すっかり気持ちが高ぶっていた。鉤鼻を照準をつけるように野菜、もとい、ナシルにつきつけ、「なんなんだ」と横柄に応答する。

「巨人族が——戻ってきました」

その一言にその場に居合わせた者たちは凍りつく。

「大変なんです、奴らは戻ってきて、家を建て始めているんです——」

「家——」

「自分らが崩した建物の残骸を突き固めて、でかいブロックに作り直して、それを積み上げて——やつら、ここに住むつもりなんですよ——」

*

「それは——好都合だ——」

居合わせた人々の目がいっせいに、そうつぶやいた者、ティコに向けられた。彼の目にはあやしい光が灯っている。

メッサナ総督府から人がごっそりいなくなった。その中にはメッサナ70人会議を構成する総督家の人間が相当含まれていた。たまたま総督府ではなく自宅住いで拘束を免れた総督家のメンバーは驚き、困惑し、パンテオラ氏にもっとも近い親族・パルダリス氏が王家本家に抗議した。

しかし、過日の音楽学生を巡る騒動があまりに常軌を逸していたこと、王家が遺憾に思っていること、総督家はその責任を問われるだろうことを告げられると言葉が返せない。パルダリス氏も、件[くだん]の騒動に関しては、やはり、『常軌を逸してる』と感じていたから。とほいうものの。

王家の仕打ちはどうなのだ！？ いきなり踏み込んで根こそぎ——人も物も——有無も言わず持って行ってしまうとは！ そういうのを常軌を逸しているというのではないのか！

そう抗議すると、「その辺は把握していない」「そのような事実の報告はない」ときた。

「——すっとぼけるんじゃない！！」生まれてこの方、そしてこの先でも、使う場面があらうとは思えなかった暴言の数々で応戦してしまうパルダリス氏であった。

「評議会が？ 化学者を貸してくれ、とは？ ええええい！！」

パルダリス氏は評議会からの通達書類を机の表面に叩きつけた。「このクソ忙しい時に！！ こっちはそれどころじゃない！！」

言いながら彼はふと考えた。評議会に王家の暴挙を相談してみるというのはどうだ？

ネウトラ（中立）評議会というくらいだから公平な判断が聞けるのではないか？

考えながら、ふふん、と鼻で笑う。昨今の評議会は役に立たないものの代名詞だった。それくらい、評議会の威信は地に落ちてしまっていた。

「それにしても、どういうことだ、化学者を貸してくれとは。彼らの作る黄金を王家が欲しがるのはわからんでもないが……評議会が黄金を欲しがるとは思えんし……」

どの道、化学者は王家からの要求が先で、切羽詰まっていた。なにせ、パンテオラ総督の命がかかっているのだ。

157.

パルダリスは、コモラが無事だったことを知って、心から喜んだ。

「パンテオラさまをお守りできなかったこと、返す返すも無念でなりません」そう頭を下げるコモラに、

「貴公になんの落ち度があるうか。いや、これまでよく彼女を支えてくれた。礼を言わねばならぬ。して、そちらの若者たちは？」パルダリスは鷹揚な態度でヤスウたちに目をやった。

「彼らはみな、私のかつての教え子、またその関係者です」

コモラは言葉少なく応じ、パルダリスは、ふむ、と……「そなたはネウトラ評議会の者か！？」

いきなり指さされてヤスウはびっくりし、パルダリスはその様子を見て破顔した。

「ふふむ、左手首の日焼けしていないところには最近まで評議会の身分証があったのだろう。どうだ、ちがうか」

「い、いえ、ちがいません」

「元・評議会の者か。身分証をどうしたのだ、取り上げられたか」

ヤスウはちらりとコモラと目を見かわし、ぐっとうなずいた。

*

ヤスウは、メッサナ出身の娘を北の湿地帯で偶然保護したことを語った。

「閣下、過日我がメッサナ市で起こった、あの異様な事件……」

コモラの言葉にパルダリスは、はた、と目を見開いた。

「音楽学生が元だという……彼女が街角で歌っているとき、そばまで聴きにいったことがあるぞ。評判になっていたのな。なるほど、と思った。一度聴いたら忘れられぬ歌だった。まさか。そのほうが保護したというのは——」

ヤスウは手のひらでパルダリスを遮った。

「おそれながら。彼女の名を口に出しちゃいけません。彼女を追い詰めたのは恐ろしいやつなんです。彼女の名を聞きつけただけでこの場に飛んでくるでしょう。そういう恐ろしいやつなんです」

「——なんと——」

「そいつは『人』を通路に使うらしい。おれ自身、そいつの余波を受けただけで、もうだめだと思った。助けが来なかったら、たぶんあのまま……」

「誰かが助けに来た、と？」

「彼女はメッサナを追われて、殺されかけていた。おれは、助けてやってくれないかと、その人に頼んだんです。その人は、引き受けるが今までの名前を忘れろと言った。彼女は今、別人の名前で遠いところにかくまってもらってる。その人の名も、場所も、言えません。決して、誰にも、口外しないと、誓いをたててきた」

ヤスウは左の握りこぶしを胸に当てた。

「そのほう……自分の身分証で他人の身の証をたてた……そういうことか？」

158.

なにがしかショックを受けたような面持ちで、パルダリスはヤスウを見ていた。金色に近い肌と髪の色はメッサナ人の特徴だが、恰幅のいいこの男はまるで神さまを絵に描いたようだった。やがて彼はヤスウに向かってひとつうなずき、話題を変えた。

「コモラよ、そなた先ほどパンテオラを守れなんだと申したな、はて……パンテオラには屈強のボディーガードがいなかったか？」

「閣下！ 打ち明けねばならないことがたくさんございます。パンテオラさまが内密にされていて、閣下のご存じないこともあるのです。パンテオラさまの警護をしていた双子のジャガー、バラムとバランケ、今、彼らはこの世におりません」

「それは——ええい、包み隠さず、すべてあきらかにせよ、パンテオラ不在となった今、私が総督代理だ！ 70人会議の決議？ そのうち何人かがパンテオラといっしょに引っ張っていかれた！ そしてただいまのヤスウの話と過日の騒動とを突き合せれば、メッサナは何者かに狙われているということではないのか！ そうとなれば、一刻も早く情報を集め、行動を起こさねば！！ 責任などいくらでも私がとるわ！！」

ある意味、メッサナ市は隔世の場所だった。豪快に言い放ったパルダリス総督代理であったが、巨人族の話は初耳だった。評議会の人間が巨人族の謎を求め、パンテオラ経由で、彼女のボディーガードを伴って冥界へと赴いたこと、巨人族はまたたく間にエウメロス王国首都、評議会本部、黄金門市をも破壊してのけたこと。それらの情報がパルダリスらのもとに届いていなかったのは、アンベレオ王国自体が無傷だったからだっ

た。

パルダリスは内心、少々後悔した。責任などいくらでもとると口にしたことを。しかし会議にかけている余裕はない、彼はそう直観する。パンテオラの内密の独断行動はおそらく正しいのだ。

脂汗と冷や汗の波状攻撃が襲ってくる。こんな状況は生まれて初めてだった。柔らかな麻布で汗をぬぐおうとしたパルダリスの目に一片の書類が。

「ヤスウよ」

「はい？」

「ヤスウ、評議会の者よ、評議会はいったい何をしようとしているのか」

この期に及んで隠すことでもあるまいと、パルダリスは書類をヤスウに手渡した。一読したヤスウはきょとんと、「化学者？ 大至急？ なんのことだろ。何か動きがあったらすぐ知らせるってナシル、言ってたんだが。なにも言ってこないぜ……こっちから呼んでみるか、ちょっと待っておくんなさい」

159.

「ナシル……こいつは評議会本部で事務的な仕事してる男なんですが、少しばかり遠感が使えるんです。こいつが言うには、『巨人族が戻って来た』、と。『奴らは自分たちで壊した街を作り直そうとしている。ここに住み着くつもりだ』。

『すぐに行動を起こさねば！』科学者ティコはそう言ったそうです。『巨人族を撃退する！ 実行に移すのだ！』『奴らがここに住むつもりならやらせておくのだ！』」

「——どういうことだ？」パルダリスは口を挟まずにいられなかった。

「人工の……え、げんし？ げんしろ？ げんしろ、というのを作るんだと……。ここ

に奴らが集まってこようが、関係ない。ここにげんしろを作れば奴らをいっぺんに撃退できる。そして二度とやってはこない。それを作るには化学者の力が必要だが、しかし、今の評議会には、働ける化学者が数名しかいない。そうだ、メッサナに応援を頼もう……そういうことだそうで」

「げんしろ、とは？」

ヤスウは首を横に振った。「ナシルにもよくわかってないらしくて。なんでも、大きなエネルギーを作り出せる機械で、それだけでも巨人族をやっつけられるんだとか、燃料になる放射性物質ってのを巨人族はえらい苦手なんだとか。すみません、おれにもさっぱり」

パルダリスは途方に暮れるヤスウからコモラへと視線を移したが、コモラもまた、さっぱり、の態だ。

「化学者、化学者、か。彼らにならわかるのだろうか。そうだ」パルダリスはぽん、と手を打った。「彼らに聞いてみよう！」

160.

階段状ピラミッドの上部を切り取り、平らになった場所に半円形のドームをのつけた建造物。そういうのが正方形の一辺に一つずつ、計四つが配置され。それらを結ぶ線の中央には平たい建物がひとつ。平たいと言っても高さは15mはあろうか、それが平たく感じられる規模。施設の四辺は堅牢な壁で囲まれている。広大な敷地内はきっちりと分けられていて、整然と植えられた植物が丁寧に世話されている。薬草園だそうだ。

名称を、『化学者の館』、という。

ヤスウとイリチャはパルダリスのお供としてそこへやってきた。『化学者の館』、そういわれても、ふたりともどうにもピンと来ない。ことにイリチャは、メッサナに到着したその日に市内を案内してくれたコモラから、『ここは天文台』だと教えられた広大な一画だったから。それで、イリチャの頭のなかには、『化学』イコール『天文台』という図式が出来上がりつつある。

一行を出迎えたのは女性だった。整った目鼻立ちは彫りこまれた彫刻のよう。しかし瞳はきらきらと明るく輝いている。質素なローブはメッサナ・ブルーと同じ系統の青。

パルダリスとは顔見知りのようで、ふたりは目顔でうなずきかわした。付きしたがっている二少年にも軽く会釈をし、施設の奥へと誘う。飾り気のない建物。美々しい彫刻ひとつない。中へ足を踏み入れてみると、高さが15mもある理由がわかる。

水平の床から姿を見せている半球がいやでも視線を、いや、首を、上下左右へと振る。その上下が5m。左右が10m。壁際の階段を上がりながら見下ろしてみて、初めてわかった。それは地球儀だ。直径10mの地球儀だった。

「いやはや、幾度見ても度肝を抜かれる。見慣れるということがない」とは、パルダリスの弁だ。「そなたは毎日見ているのであろうが」

案内にたつ女性は柔らかく微笑んだ。「閣下が抱かれる印象は間違いではございません。生き生きとした人間を毎日眺めても見慣れるということがないのといっしょでございます」

パルダリスは、ふむ、と息をのむ。半球体ということは球体の半分は下、つまり地下にある。動力がどうなっているのかわからないが、球はゆっくりと回転しているのだった。

「メンドルプ先生はお忙しいのだろう？」

「閣下がおいでになるというので大喜びしておられましたわ」女性の手をあげて遠くを指さした。メンドルプ先生という人はそこにいるらしい。

ヤスウは物珍しさにきょろきょろしつつ、女性が指す方に目をやって、げ、と唸る。
あそこまで歩くんか？

女性はくすっと笑ってヤスウを、次にイリチャに目をやった。彼らが受けている衝撃をひそかに楽しんでいる、あたたかな笑いだ。

「考えてみれば」思い出したようにパルダリスがいう。「そなたの名を知らなんだ。聞いてもかまわないかね？」

「もちろんかまいません」女性は立ち止まって三人を順繰りにみた。「私の名は——」と、一息おく。なにごとか企んでいるように目が輝いている。

「——数値にすれば55ありますが、文字の数は8しかありません。三番目の文字は五番目の文字の三分の一です。

これを六番目の文字に足すと、その根が最初の文字の値分だけ三番目の文字より大きい数になります。それは四番目の半分です。五番目の文字と七番目の文字は同数です。また最後の文字も最初の文字と同数です。この二つを合わせると六番目の文字と同数になりますが、六番目の文字はしかし三番目の文字の三倍より四つだけ大きい。さて皆さん、私はなんという名？」

三人をあ然とさせておいて、女性はにっこりとほほ笑み、ひらりと衣をひるがえして再び先に立って地球儀を見下ろす壁際の通路を歩き出した。

「アルチニアさん」

女性は、はっと足を止めて振り返った。今の声は中年然としたパルダリスではないし、少年その1は彼女が出したなぞなぞに目を白黒させている最中、ということは……少年その2が紅い目をひとつ瞬いて続けた。「……合ってる?」、と。

(あとがきを参照)

「ふむ、そうそう、アルチニアだ。合ってるだろう?」

「わかんねー!! おいこらてめーなんでわかるんだ!!」

「あーなんとなく」

アルチニアは歩き戻り、「なんとなく、ですって? まあ! でもわかってくれてうれしいわ。あなた、お名前は?」

「イリチャ」

「イリチャ。あら、私のとちょっと似てるわねえ」

彼女はイリチャの手をとって促し、再び歩き出す。タイプは違うけどヘルガ王女に雰囲気が似てるかな、と思いつつ、ふと振り返ると、パルダリスは検算に気をとられ、ヤスウの敵対心のこもった燃える目がイリチャを睨み返してきた。

「ハ、ハイヤーン博士!？」思わずその人に指を差しつけ、ヤスウは大声をあげた。

白髪 of 総髪に白い顎髭、光の強い藍色の目、大柄な身を包む荒い織地のローブ。ヤスウの知っている評議会のハイヤーン博士その人ではないか!

すると、その人は鷹揚に破顔した。パルダリスもよく笑うが、メッサナの人々はとにかく表情が豊かだ。ヤスウは本部でのハイヤーン博士の気難しい顔しか思い出せず、この笑顔には面食らった。

「ハイヤーン! あれは弟じゃ」

「え」

「わしはメンドルプと申す。弟を知っていると? するとそなたはネウトラ評議会から来たのだな?」

メンドルプは大きな手を自分から差し出し、がっしとばかり、ヤスウの手をとった。じいさんよりおねえさんの手の方がいい、ちらと思ったヤスウである。彼は過日、このじいさんそっくりの男に蹴りだされるように評議会を飛び出してきたのだった。

*

メンドルプの表情がみるみる変わるのを見て、パルダリス総督代理はぼう然とした。ネウトラ評議会がメッサナの化学者の協力を求めてきたこと、そしてその理由をヤスウから聞かされた時のことである。

「オクロを再現するだと——」 そう言ったきり、メンドルプは絶句してしまったのだ。

ヤスウはおそるおそる口を開く。「ナシルもおれもまるっきり素人、伝言ゲームみてえな話になってるかもしれねえです。あのう、それ、ひょっとしてヤバいものなんですかい？」

メンドルプは腰かけた椅子のひじ掛けを強くつかみ、あの話をした。

「 ” 天然の放射性的物質[ウラン]に富んだ鉱床に地下水が染み込んで、水が中性子減速材として機能することで核分裂反応が起こる。

核分裂反応による熱で地下水が沸騰して無くなると反応が減速して止まる。

鉱床の温度が冷えて、短命の核分裂生成物が崩壊したあと、地下水が染み込むと、また同じサイクルを繰り返すという状態 ”

それが天然の原子炉だ。ここメッサナからずっと東にそういう場所が実際あるのだ。おそらく20億年も前からそのような反応が数十万年続いた。えらく昔のことのようだが、レムリアンは放射性物質がそこにあることを知っていたようだ。放射性物質を大量に、あるいは長時間浴びると、体の細胞に異常をきたす。遺伝的影響もある」

メンドルプはもっといろいろなことを思い浮かべていたが口には出さなかった。とても、出せなかった。「生物にとってひじょうに危険な影響がある、それだけではないのだ」

163.

「核分裂——原子核分裂——」

メンドルプはうわごとのように虚ろな声で繰り返す。

「諸君。化学者に不可能はない。化学者には自然のすべてが掌[たなごころ]を指すようにわかっている。ゆえに、黄金だろうがなんだろうが、容易に造ることができる。だが——」

パルダリスは、メッサナの化学者の長がごくりとお喉を鳴らすのをみた。

「原子核分裂だけは」メンドルプは頭を振った。そして言った。「わからん」、と。そして口を挟もうとするヤスウを手で抑えた。

「そういう事象が、自然に起きていた場所があることは知っておる。太古から長年に渡って核分裂が起きていたということは知っておる。だが。なぜ、そんなことが起こり得るのか。わからん」

メンドルプの困惑ぶりはただごとではなかった。一同も困惑して互いの表情を読もうとする。

164.

「なにやらやっかいな物らしいですが……」ようやく口を開いたパルダリス総督代理。

「やっかい。まさに、厄介なのだよ。この世に、なぜあのようなものが存在しうるのか」無表情に答えるメンドルプ。ローブの胸に同心円状の複雑な掘込みのある金色のメダルが鈍く輝いている。

「レムリアンが近寄らなかったのは、病気になるから、ではない。アレはこの世の摂理に反するもの。存在するはずがないものだからだ。諸君。理解しがたいかもしれんが、そういうことなのだ」

「いや、メンドルプ先生」ヤスウは果敢にも口を挟む。「そういうことって言われても。どういうことなんで？」

「君は、原子というものを知っているか。それは、目に見えないほど恐ろしく小さい。だが確かに在る。この世のありとあらゆる物質を作っているものだ。それは、作られた。神々によって。それはこの世を形作る設計図なのだ」

ヤスウはぼかんとしてしまった。意味がわからない。「いや、だって、目に見えないくらいちっこいんでしょ？　それが設計図？」

メンドルプは両手のひらを合わせ、それからぎゅうっと力をこめて両側から押して握り締めた。

「神々の秩序の法則、人類のための摂理、その設計図を圧縮したのが、原子だ。わかるかね。神々の設計図である原子の核の分裂？　分裂……させる？　それがどういうことか、何を意味するか、君にはわかるかね、私にはわからん！！」

第九章 『原子の火』

第十章へ続く

おまけ的番外編というか番外編のおまけ

今回参考にした資料が気分的にヘビーだったのでお口直しに番外編をいっぱつ。

2011年のあの原発事故の記憶も生々しい頃のもの。そーいえば、民主党政権で総理はカンさん、秋ごろノダさんにかわったんだった。

これを書いたのは、火精霊くんが一仕事終えた（違う名前で働いてた）あとのことで、そこへ震災と原発事故が。原子力を使うということの問題点はこんなところなのかと、生半可に考えていた。本当の問題はどうもそうじゃないらしい。

#164でメンドルプ先生が言っているのは、R・シュタイナーの「ロゴスと原子」（1905年10月にごく少数者相手に行われたという講義。『神殿伝説と黄金伝説』に掲載）その講義内容の意識・要約。「わからん！！」はミネムラの感想。

1919年には、ある原子を人工的に別の原子に変えられることが証明され、1938年に核分裂が発見されました。シュタイナーが亡くなったのは1925年。もし生きていたら何を言っただろう。

昨今のチャネリングで地球外生命体を名乗る人たちが何度も「核融合はまだしも、核分裂だけはだめ。ぜったい」と言ってる。やっぱり相当、マズいことなんじゃなかろうか。

*

火精霊さん火精霊さんおいでください火精霊さん火精霊さんおいでください火精霊さん
火精霊さんおいでくだ……

「——ちよっとー！」

あっ！！ 来たっ！！

「なにそのへんな呪文！！」

え、お友達さそってお部屋の窓ちょっと開けて、みんなでテーブルの十円玉に指のつけて儀式なんてやってませんよ

「ぼくはモノノケか！！」

そんなこと言ったらコッ○リさまがお怒りになります。いえ、冗談です、冗談。
それから筆者は基本的にひとりじゃないとモノ書けませんので今はほかにだれもいません。安心してそこから、さ、出ておいで

「ぼくはどんよくな肉食獣だ、人見知りのハムスターじゃない！ ひまわりのタネなんかでおびきだされないぞ！！」

そんなこといったってー。どこかへ引っこんだっきり、いなくなっちゃったじゃありませんかー。どこ行ってたんですか。どう呼びすればいいんですか。それに——そのうわつついた格好……原色の多色使い……やめてもらえませんか、服は白一色という設定なんです。

「オフになにを着ようが、なにしようが、あれこれ言われる筋合いはない！！ ただでさえ主役は窮屈なんだ！！ ごちゃごちゃいうと主役降りてやる！！」

まあまあ。落ち着いて。ところでどちらへおでかけですか？

「セーシェルだよ。自分自身を取り戻すんだ！ かむばっくまいそうる！！」

ああセーシェルといえぱ！

「セーシェルといえぱそれしかない」

温泉ですね

「ダイビングだよダイビング！！ 潜りにいくの！！！」

今までだってどこかに潜ってたじゃありませんか。だいたいあったかいところへ浸かりに行くんでしょ、温泉とどっちがうんですか？

「ちがうっぜんっぜんちがうっ！！ あのーもういいかな？ そろそろ行かないと電車に乗り遅れる！」

あそれはまずいですね、セーシェルまでの直通列車は日に一本しかありません！

「そーだよ一日に一本しかないんだよ！！ それも風が吹けば遅れるし雨がふれば止まっちゃう！ 今日は快晴でおでかけ日和だ！ じゃそういうわけだから！！」

さすがですねえ

「——なにが？」

元素霊は道德とか倫理とかにいったい関わらないとか

「なにがさすがなんだか。あのさ、道德とか倫理の定義にはかならず『人として』という枕詞がつくの知ってる？ 道德とか倫理とかは人間界にしかないんだ。元素霊は人間じゃないからそういうのと関係ありません。じゃ」

ちょっと待ってください、話しはここからが本番です

「え”」

本日は原子の火についてどうお考えか、火精霊さまの見解をお聞きしたくてお呼び立ていたしました。

*

「げんしのひ～？」

ひらがなだと間が抜けますね、それとも『ひ～』は悲鳴？

「間が抜けてようが悲鳴だろうがどっちでもいいよ、ぼくには関係ない」

関係ないって、ちょっと無責任じゃありませんか、あなたは火精霊でしょう！？原子の火のことは社会的超大々問題になってるんですよ、ひとごとじゃないんですよ！！

「なんとでもいってよ、無責任？ そりゃあだって精霊だもの」

あの一もしかしてコメントはホントにそれだけ？

「うん。とくにいうことはない」

どういことですか！ だって今や原子の火がもとでウランやプルトニウムがああでこうでセシウムやストロンチウムがそんなこんなで！ 与野党入り乱れてすったもんだの大混戦！ いつのまにかそうりだいじん変わってるし！！！
火精霊のあなたがそんな無関心なことでもいいと思ってるんですか！！

「ぼく未成年だも〜ん。そういうことはおとなが考えればいいんだも〜ん」

そーいう問題ですか！！

「じゃあ、原子力発電所作ったのはだれ？ 原子炉作ったのは？ 燃料のプルトニウム239は人工放射性元素というやつで、ウランから作るんだ。誰かが作らなければこの世に存在しないものなんだ。

原子核に人間の手を加え、核分裂を起こさせると、結果、莫大なエネルギーが生まれる。それはとてとても、とてつもなく、莫大なもので、人の心を動かすには十分だった。

人は心動かされ、自然に存在しない、人工の火を手に入れた。

セシウム137もストロンチウム90も、いわばその副産物で、自然のものじゃあない、だから自然界と、もっといえは生命的なものと、循環しない。むしろ、蝕み、破壊する。そういうものを手に入れるべきか否か、進むのか立ち止まるのか、それを誰が、いつ、決めるのか。常に選択肢はあったはずだろ。そして選んで選んで、ここまで来た。そしてこれからもどうすべきか、選べる。

考えてみなよ、意図して選ぶという行為は人間にしかできないんだ。人間だけが持つて最強の剣で、最強の盾なんだけどね。

元素霊は自然界の背後にあつて、かくあるべし、と宇宙の理[ことわり]のなかに定められている。理[ことわり]によって、非・自然のものには関われない。関心がないのとは意味が違うよ。関わることは不可能なんだ。

それが火精霊の原子の火に対する立脚点だよ。そんなとこでいいかな？」

はあ……

「じゃ行くよ。ほんとに電車に乗り遅れちゃうよ！」

あーちょっと待ってください！！

*

「まだなんかあるの～～」

するとあなたは原子の火や熱に対して影響力を持たない、そういうことですか？

「そういうこと」

う～～む～～

「なになやんでるの？」

いえ、火精霊のあなたなら原子炉とその周辺の問題をなんとかしてくれるんじゃないかなーと思ったんですよー

「残念だったね。ぼくはなんにもできない。できるとすれば、視てる、だけだね」

視てるだけ？

「そ、傍観。変えられるのは、作った本人つまり人間だけだ」

理屈はわからないでもないですが……あなたにあなたの立脚点があるように、この問題は人々の実生活に緊密にむすびついているゆえに、立脚点は無数に、それこそ、そこにいる人の数だけあります。この問題への意見、思い、今後どうするかといった展望もまた、無数に在るんです……

「ひとつの立場を主張すると、すかさず別の立場からアクションが起きるみたいだね」

そうです。それぞれの立場はそれぞれたいへん深刻かつ切実な背景を持っています。どれが優先され、あとにまわされるか、どれを選び、選ばないか、あとにまわされ、選ばれなかったことからどういった影響がでてくるものか……

必要不可欠だったものがある時を境に自分を脅かすようになって、あまりに問題が大きすぎて、……とにかく、身を守らなくちゃ、と……もしかしたら、火精霊さん、元素霊であるあなたもおびやかされてるのでは……？

*

「まー……それはぼくだけの問題じゃない。土も風も水も、身の危険を感じてる。こっちから手を出せないだけにね」

えーとあのーそれはひょっとしてひじょうにまずいことでは??
あっ！ それであなたはごはんにも手もつけられず、温泉へ行って現実逃避を——！！

「ぼーくーはひまわりのタネなんか食べない、どうせ釣るならもっとマシなものにしてよ、人間関係に投資けちるとあとでろくなことにならないよ！ それから温泉じゃなくてセーシェルってんだろ！！」

ああごめんなさいごめんなさい、怒らないでください、あなたがちょん切れると暑くてかないません

「ひとのせいにしないでほしい。暑いのは夏だからだ」

しかし！
自然界の背後にある元素霊を、ごはんものどを通らないほど怯えさせるものとは！
それは——なんて恐ろしい——！

「あとでインタビュー料おもいっきり請求させてもらうからね。
ほかの元素霊はどうか知らないけど、ぼくはそれほど恐れちゃいない。人間がきのうきょう作ったものですぐにどうかなるほど、自然界はヤワじゃない。だからそんなに深刻になることないよ」

え——それはまた——なんか楽観的すぎませんか？

「そう？ そうだなあ、時間の感覚は自然界と人間では違うからなあ、自然界の『すぐ』は百年単位だったりする。だいたい人間の一生分」

——深刻になるなというほうがムリですけど、それ。

「だーから、自然界が何百年も何千年も、ひょっとしたら何万年もフォローしなくちゃならないようなことに、人間は手を出してしまったんだって！ 原子炉が壊れようが壊れまいが、一度核燃料を燃やすと、とんでもなく厄介なものがあとに残るってわかっていながら！ ——無責任なのはどっちだ！！！」

……熱いですね。暑いです

「わるかったね、はい、ウチワ！ だけどこのインタビューはちゃんと外へ出るの？
へんに手を加えたりしたらただじゃおかない、崇ってやるからな」

出します出します、手を加えたりしません、このまんまあるがままに出しますよ、オフ
レコなしノーカットデジタルリマスターディレクターズエディション版で。
ところで好きな食べ物はなんでしたっけ？

「たまご料理以外ならなんでもこいだけど。なに、おごってくれるの？」

はい、お供えさせていただきます。だから崇らないでね

「ホントだろうなウソだったらすぐに崇ってやる。と、さあそんなわけで！
この世の極楽！ 南の海！ ダイビング三昧の旅へ！！ 行ってきまーす」

……なんで窓の隙間から出てくの……それにひまわり柄の浮輪、忘れてますけど。
まいいや、行ってらっしゃーい——ゆっくり休養してくださいーい。

これから何百年も何千年も、ひよっとしたら何万年も、視てなくちゃならない、かもし
れないもの……

おしまい

第九章のあとがき

「火の精霊」抜粋版をお持ちの方には申し訳ないですが、話がどんどん違う方向にいこうとしている。前者は全122話だった。こっちは今のところ164話。とっくにボリューム上回ってます。もしかしたら、オリカルクムの記憶と繋がらなくなるかもしれない。まいったな。ま、しょーがない。(おいおい)

さて、黄金郷の伝説というのがあります。アマゾンの奥にあるらしいというので、スペイン人はじめ多々のヨーロッパ人が探し回ったけれど、見つからなかったという。今回冒頭の捨て台詞みたいな“なんだ黄金か〜”は、『薔薇十字宣言』の一節。こういうのをどこかで見たことがあるぞっと探してみれば、スコット・エリオットの『アトランティスの歴史』の中で、トルテク人の時代には黄金作りはひじょうに大規模かつ広範囲に行われていたという記述があるのです。トルテク人が活躍した土地とはつまり、メッサナのあたりのことです。なので、本編では化学者の集団＝黄金郷というふうに考えています。まあ、近年カリフォルニアではじっさい、金鉱見つかってますし、ひょっとしたらアマゾンの奥地には物理的な大金鉱があるのかもしれない。が、こういうのも面白いんでないかい、ということ。

[天然の原子炉](#)。西アフリカ、ガボン共和国に実在するものです。

きれいなおねえさんのなぞなぞは『化学の結婚』（J・V・アンドレーエ）から。地下に半分埋め込まれた巨大な地球儀も同じく『化学の結婚』から。なぞなぞの方程式あげておきますので、興味のある方、解いてみてください。WORDでこういう方程式の記述ができるんだとわかったところでミネムラは力尽きました。余は満足ぢや状態です。

もんだい

「——数値にすれば55ありますが、文字の数は8しかありません。三番目の文字は五番目の文字の三分の一です。

これを六番目の文字に足すと、その根が最初の文字の値分だけ三番目の文字より大きい数になります。それは四番目の半分です。五番目の文字と七番目の文字は同数です。また最後の文字も最初の文字と同数です。この二つを合わせると六番目の文字と同数になりますが、六番目の文字はしかし三番目の文字の三倍より四つだけ大きい。さて、私はなんという名？」

問題の名前の8文字を仮にギリシャ文字の α から θ までで表し、三番目の γ を未知数 x と置く。←

その根が三番目の文字より最初の文字の値分だけ大きい数を y と置く。←

すると、次の八つの方程式ができる。←

$$\begin{aligned}
\text{I} & \quad \alpha + \beta + \gamma + \delta + \varepsilon + \zeta + \eta + \theta = 55 \leftarrow \\
\text{II} & \quad \varepsilon = 3x \leftarrow \\
\text{III} & \quad \zeta = y - x \quad \text{IIIa} \quad \sqrt{y} = x + a \quad y = (x + a)^2 \leftarrow \\
\text{IV} & \quad \delta = 2\sqrt{y} \leftarrow \\
\text{V} & \quad \varepsilon = \eta \leftarrow \\
\text{VI} & \quad \theta = \alpha \leftarrow \\
\text{VII} & \quad \beta = \zeta - (\theta + a) \leftarrow \\
\text{VIII} & \quad \zeta = 3x + 4 \leftarrow
\end{aligned}$$

\leftarrow

方程式IIIからVIIまで右辺を x で表す。 \leftarrow

$$\begin{aligned}
\text{III} & \quad \theta \text{ または } 3x + 4 = (x + a)^2 - x \quad \text{ゆえに、} a = 2\sqrt{x + 1} - x \leftarrow \\
\text{IV} & \quad \delta = 4\sqrt{x + 1} \leftarrow \\
\text{V} & \quad \eta = 3x \leftarrow \\
\text{VI} & \quad \theta = 2\sqrt{x + 1} - x \leftarrow \\
\text{VII} & \quad \beta = 5x + 4 - 4\sqrt{x + 1} \leftarrow
\end{aligned}$$

\leftarrow

方程式 I に組み込まれた語は次の方程式をなす。 \leftarrow

$$(2\sqrt{x + 1} - x) + (5x + 4 - 4\sqrt{x + 1}) + (x) + (4\sqrt{x + 1}) + (3x) + (3x + 4) + (3x) + (2\sqrt{x + 1} - x) = 55 \leftarrow$$

計算の結果は次の二次方程式となる。 \leftarrow

$$169x^2 - 1238x = -2193 \leftarrow$$

x に相当する値は 3 である。ゆえに、 $\gamma = 3$ したがって、 \leftarrow

$$\alpha = 1 \quad \beta = 11 \quad \delta = 8 \quad \varepsilon = 9 \quad \zeta = 13 \quad \eta = 9 \quad \theta = 1 \leftarrow$$

\leftarrow

これらの数をそれぞれ対応するアルファベット文字で $1=a, 2=b, 3=c$ のように表すと、女の名前 Alchinia となる。 \leftarrow

錬金術を指すラテン語 **alchimia** の m と一字違い \leftarrow

奥付

Salamander in the circle

第九章 原子の火

2022年6月20日 初版発行

著者 峯村 明 [E-mail](#)

表紙素材 「[月とサカナ](#)」

「[イラストAC](#)」

制作 Puboo

発行所 デザインエッグ株式会社
